

The Red Pony 研究

— “The Great Mountains” と
“The Leader of the People” を中心に —

加藤光男

1

The Red Pony は1937年 “The Gift”, “The Great Mountains”, “The Promise” の3篇を集めて単行本として出版され、さらに翌1938年 *The Long Valley* の中に収められた。この短篇集に “The Leader of the People” が加えられていて、1945年 *The Red Pony* が再度単行本として出版された時にはこの作品を第4話とした4篇で構成されるようになり、以後この形になっている。しかし、このような経過にもかかわらず、John Steinbeck は元々この短篇集をひとつの中篇小説 (Novelette) として書き始めたものらしく、その草稿はカリフォルニア大学パークレー校のバンクロフト図書館に所蔵されている由である。⁽¹⁾

このようないきさつも考慮に入れて、*The Red Pony* を構成の面から見ると、第1話 “The Gift” と第3話 “The Promise” は Jody に与えられる馬をめぐる同一のテーマを持った表題作と言うことができる。第2話 “The Great Mountains” では Gitano というパイサノ (paisano) の老人が、第4話 “The Leader of the People” では祖父という共に年老いたものが Jody の成長に大きなかわりを持つという共通のテーマがあり、第1話、第3話が動的、表にあたる部分とするなら、これらは静的、裏にあたる部分と言うことができよう。このようにこれら4篇は動と静とが交互に並べられ、ひとつの統一を作り出している。

スタインベックは *The Grapes of Wrath* に於て inter chapter と narrative chapter を交互に並べるという方法を用いているが、これはそれにも似た技巧と見なすことができる。第2話では Gitano がそして第4話では祖父が共に外の世界から Tiflin 家に入ってきた者であり、それ故に Jody により深い印象と教訓を与えていくのであるが、これら裏にあたる部分は、*The Grapes of Wrath* の inter chapter がそうであったように、Tiflin の牧場という小宇宙に時間的巾と空間的広がりを与えている。そして Jody にさらに大きな世界に対する視点を与えているのである。

作品の内容についてスタインベック自身は次のように語っている。

The Red Pony was written a long time ago, when there was desolation in my family. The first death had occurred. And the family, which every child believes to be immortal, was shattered. Perhaps this is the first adulthood of any man or woman. The first tortured question “Why?” and then acceptance, and then the child becomes a man. *The Red Pony* was an attempt, an experiment if you wish, to set down this loss and acceptance and growth.⁽²⁾

このようなスタインベックの意図の通りに *The Red Pony* の中で10歳から12歳ぐらいまでの Jody 少年が周囲の人達の温かい愛情と California の時にはおだやかな、時には厳しい自然にやさしく育ぐくまれ、又翻弄されつつたくましく成長していく姿が見られる。このよう

に *The Red Pony* は Jody 少年の成長記, initiation の記録として読むことができるが, その層の下にもうひとつ別の層, 言いかえるともうひとつ別のスタインベックのメッセージの存在を感じるのである。この点について先に述べたように第2話 “The Great Mountains”, 第4話 “The Leader of the People” には Jody 少年の成長記とは別の視点が見られるので, これらを中心に光を当て明らかにしてみたい。

2

第2話 “The Great Mountains” に於ける Jody の成長は Gitano というパイサノの老人との出会いが中心となる。この Gitano という老人は突然 Tiflin 家に現われて, 自分はここで生れたから戻ってきた, 死ぬまでここにいるつもりだと言い出すのだが, この申し出は白人の社会では全く奇妙なものであり, 彼は Tiflin 家の人達には不思議な理解しづらい存在として映る。

しかし彼はスタインベックのよく書く智恵の足りない奇形的登場人物, 例えば *Of Mice and Men* の Lennie, “Johnny Bear” の Johnny とか *Cannary Row* の Franky 等とは違い, むしろ種族の文化的伝統を色濃く受け継いでいる, *The Pearl* の Kino, “The Flight” の Pepé とか母親, *To a God Unknown* の Huanito 等と同列の登場人物と考えられる。

Gitano には父祖伝来の土地に対する特別な帰属意識のようなものがあり, 年老いてからは自分の生れた土地に帰るのが当然の事であると考えている。“...It was all one rancho before you came.”⁽³⁾ という彼の発言から見て, 彼等が白人と同じような土地所有の観念を持っているのかどうか疑問である。以前彼等は大地と一体になって伸々と生活していたが, その土地を白人の概念では手放してしまったと思われる。しかし土地を手放したことは彼等には大きな意味はなく, Gitano に見られるように土地に対する帰属意識は消えないのである。

しかし結局土地を失った彼等は *Tortilla Flat* の登場人物のように白人社会に寄生して生活することになり, 形の上からは白人社会に同化するが, その社会規範にそって生活するというよりは親から教えられたように生活していく訳である。しかし, そのような過程で彼等の ethnic heritage といったものは確実に風化していく。白人達はこのような先住民族からカリフォルニアの土地を奪ったのだが, 彼等の土地と, あるいは自然と一体であった精神的な面には考慮が払われたことはなかった。こう考えてくると先程の Gitano の言葉は大きな意味と重さを持って迫ってくるものがある。彼等の中に, アメリカ人には理解できない世界観の存在と, アメリカにはない文化的伝統の存在, さらにそれらに対する彼等の誇りを感じるのである。

彼等の文化的伝統といったものはこの作品にはっきりと書かれてはいないが, 二, 三注目すべき例を挙げてみたい。ひとつは大連峰についての次のエピソードから読み取ることができる。Jody はしばしば神秘に満ちた西の大連峰について大人達に聞くがまともには答えてくれなかった。結局それは Jody にとって未知のままであり以前にも増して神秘的であり, 恐怖を与える存在であり, 又そこにはこれから探っていくなくてはならない何か素晴らしいもの, 何か不思議なものを秘めた山になっていた。しかし Gitano は答えることができた。小さな子供の頃父親に連れていってもらったことがあり, そこは静かでもとてもいい所だったような気がすると言うのである。そして, それを話す時の Gitano は一瞬, 遠い昔, 父親とあるいは兄弟達とその山に遊んだことにまつわる思い出にひたっているかのような表情になる。

第1話にあるように, Jody はいつも父親にどこかへ連れて行って欲しいと考えているのだ

がその機会はあまりないようである。しかし、突然とび込んできたこの不思議なパイサノの老人が、あの大連峰に行ったことがある、しかも父親に連れていってもらったということを知り、Jody は驚異と羨望の念にかられすっかり Gitano のとりこになり、Gitano と大連峰とを重ね合せ、彼の存在に大きな価値を見出す。スタインベックはここで明らかに白人にはないものを持っている Gitano 達の文化的伝統に目を向けさせ、その相違をはっきりと書いて見せていると思われる。

次に Gitano がしばしば使う my father という言葉について考えてみたい。最初に使われるのは、彼が Tiflin 家に来た時で、“...I was born here and my father, too”⁽⁴⁾ と言い、そして “...I and my father...”⁽⁵⁾ は今は雨で流された 'dobe house に住んでいたと言う。次は大連峰に行ったことがあるかとの間に “...I went with my father.”⁽⁶⁾ と言い、最後は剣 (a lean and lovely rapier with a golden basket hilt)⁽⁷⁾ の場面で、Jody がどこで手に入れたのか聞くと “I got it from my father.”⁽⁸⁾ と答える。

Gitano の持物と言えど着がえと古びた靴 3 足しかないのにそのような剣を長い間持ち歩いていたことから、この剣はどんなことがあっても手放せないものと思われ、そこには親子関係、世代のつながりに対する示唆がある。そうして my father, with my father, from my father という句は順々に読者の心に積み重なって、温かい血の通った親子関係一れんめんとしてつながる親から子、子から孫へという世代のつながりをさらに強く感じさせるのである。さらにこの剣は親から子へと継承され、又子から孫へと継承されるべきパイサノ達の文化的伝統、精神的遺産を象徴しているものと見なすことができるのである。

Tiflin 家に泊った夜 Gitano はたった一人でこの剣にじっと見入っていた。彼が翌朝山に入ってしまうことを考え合わせると、彼は父親から渡されたその剣を見ながら遠い昔を思い、又自分にはその剣を渡すべき子孫はいないという境遇をふりかえり、死を決意していたとは考えられないだろうか。ここに白人によって土地を占領され、白人に同化させられてしまった種族のひとつの終焉を読みとることができる。

翌朝 Gitano は朝早く誰れにも気付かれずに、老いぼれの飼い殺しの馬 Easter に乗って大連峰の中に入っていく。Easter という暗示的な名前の馬に乗って静かでもとてもいい所だったような気がする山に例の剣を持って行ったのであるが、彼等を待っているのは死という現実しかない。カリフォルニアに生きる人には馬はなくてはならないもので、人と馬とは一種の運命共同体的存在であるとスタインベックは考えていて、第 1 話、第 3 話では重要な役割を担っていた馬が、ここでは同じ運命共同体といっても、どちらかがどちらかの死を見守るという役割を担わされている。しかしこのシーンからは「死」というイメージは伝わっては来ない。それよりも悟を開いた僧侶か老兵を彷彿とさせるものがある。

Jody は西の大連峰には大昔の都の跡かなにかがあるのではないかと想像しているが、同じようにスタインベックの他の作品 *To a God Unknown* には山の松林の中に昔インディアン達が信仰の対象にしていた聖なる場所というのが出てくる。もしかしたらそのような所がこの山の中にはあって、彼等はそこへ巡礼に行ったのかも知れない。しかし彼等を待っているのは確実な死である。Gitano は自ら死地を求めて山に入ったのである。これは正に *The Flight* の Pepé が逃亡の果て姿を見せない追手に自らをさらし、死んでしまう結果と類似した発想であり、ここにもパイサノ達の精神的遺産のひとつを見ることができる。

それは Easter という老馬の「復活」というイメージとも、どこかで確実に重なるのであるが、生といい、死といい、いずれも宇宙的生命体のひとつの現われにしかすぎないという思想、

東洋的死生観，輪廻転生の思想にも結びつくものを感じるのである。ここでもう一度，*To a God Unknown* を思い起すと，主人公 Joseph は大旱魃の時自分の腕にナイフを刺し血を流して果てるのであるが，彼はやがて自分の上に草が生え牧場は蘇生すると考えている。

‘I am the land,’...‘I am the rain. The grass will grow out of me in a little while.’⁽⁹⁾

これがその部分からの引用であるが，Gitano の行為の奥にある死生観と同じではないだろうか。しかし，これはキリスト教の死生観とは根本的に違うものであり，それは単にそれだけでなく大きな世界観の相違でもあり，ここにスタインベックの白人と彼等先住民とを対比させた意図があると思われる。

この点に関して 1941 年発行の *Sea of Cortez* の中に興味ある一節があるので引用したいが，この中の西洋文明と，インディアンとの対比は，今まで分析してきたものに対する理解を深めてくれるであろう。

...when our species progresses toward extinction or marches into the forehead of God—there will be certain degenerate groups left behind, say, the Indians of Lower California, in the shadows of the rocks or sitting motionless in the dugout canoes. They may remain to sun themselves, to eat and starve and sleep and reproduce. Now they have many legends as hazy and magical as the mirage. Perhaps then they will have another concerning a great and god-like race that flew away in four-motored bombers to the accompaniment of exploding bombs, the voice of God calling them home.⁽¹⁰⁾

この文には我々が進歩と呼ぶものの行きつく姿がその宗教とともに皮肉たっぷりに書かれており，同時にその対局にある種族に対する興味ないしは評価も述べられている。

この点に関して Carl Tiflin を分析するなかでさらに敷衍していきたい。Carl は Gitano が先住民を代表する者として書かれているように，白人の典型として書かれている。第 1 話，第 3 話では厳格ではあっても，Jody の人生の先輩，指導者である良い父親としての面を見せるが，第 2 話では全く別の面，合理的経営者，ビジネスマンとしての面を見せる。しかも 1930 年代という厳しい時代に，借金を背負った小農場経営者 Carl として現われる。

それで Carl は Gitano の様子を見て同情しようとする心が湧いてもその心を力づくで押えつけ，“...Why should I worry about him?”⁽¹¹⁾ と言い放ち，老いぼれて働けなくなっている Easter にかけて Gitano につらく当り，思いやりを示さない。そうしてそれは，時にはあまりに厳しく惨酷とさえ思える調子を帯びる。又 Carl 達とは一身体である馬についても同様の対応を示し，“Old things ought to be put out of misery,”...“One shot, a big noise, one big pain in the head maybe, and that’s all...”⁽¹²⁾ と事もなげに言うのである。このように Carl は実理的というか経済的に非常に割り切った考え方をするのである。この点にスタインベックの目が向いているのではないだろうか。即ちあまりにも実理主義的時代の，あまりにも厳しい社会情勢の中で，自分を押し殺してまでも生きていかななくてはならない庶民の姿を描くことであり，そこには，Romantic な心情も枯渇し，humanistic なものは矮少化してしまうという時代に対する告発がある。それは又 Gitano 達の持っていた世界とは全く違うものなのである。このような Carl の経営者としての対応で Gitano は死へと追いやられることになるのであるがこのことは Jody にとって量り知れない損失につながっているのである。

Jody は父親 Carl が Gitano の申し出を拒否し，さらにつらい言葉をなげかける時，Gitano

をいたわり、父親を弁護する。そして Gitano を置いてやらないことで Carl がどんなに自分を恥じているか察することができる。また Gitano の他人には見られたくない例の剣を見てしまった時、これは絶対他人には知らせてはいけないことだと心に誓う。このように Jody は突然やって来た Gitano との出会いから多くのことを学んでいくのが判るが、もし彼がずっと家にいてくれたら、もっと多くの新しいことを学ぶことができると思われるのである。

それは Gitano が山に入っていったのを知った時の Jody の悲しさからも伝ってくる。この悲しさは、自分の親達には期待できないものを Gitano が持っていることを直観し、もっと沢山のことを知ろうとしていたのに不可能になったこと、その機会がなくなったことに対する莫とした悲しさと考えることができる。こうして彼の新しい成長の機会がひとつなくなったのであるが、これはそれだけに止まらず、アメリカ全体の損失と考えることができる。それはアメリカ人がアメリカ大陸を先住の人達から奪い取ったけれども、彼等から精神的なものは何も引き継がなかったからである。厳しい自然の中で自然と一体になって生活してきた彼等にはあとからやってきた白人とは違った伝統や文化があり、世界観があったのに、それらに全く目を向けることなく利潤の追求のみを続けている時代への警鐘ということができる。スタインベックは間違いなくアメリカ大陸の先住民の中に東洋的香りのするものを見、その東洋的神秘思想に興味と憧れを感じ、そこにひとつの慰さめ、光明、そして救いを見い出していたと言える。スタインベックはこのような意図を含めて第2話 “The Great Mountains” を書いたのであり、それは又第4話へとつながるテーマでもある。

3

第4話 “The Leader of the People” は第2話 “The Great Mountains” と全く同じ枠組を持っている作品である。祖父と Gitano はもう仕事をせずに過去に生きているような二人であるが、それぞれ Jody の成長に大きな役割を果たす。第2話で Gitano が Jody の精神的成長に果たした役割を、第4話では祖父が別のテーマをもって担うことになる。Carl は第2話と同じように現実しか見ることのできない実利主義者としての面がやはり強調されている。次に Mrs. Tiflin と Billy についていえば、第2話では Carl のふるまいを規制する役割を担ったのは Billy であったが、ここでは Mrs. Tiflin がその役割を引き受けている。最後に Jody は Gitano に対する時と同じように祖父の生きていた過去に興味と憧れを持ち、彼から多くのものを吸収していくのである。

Carl は第2話では Gitano に厳しく当たったようにここでも妻の父親（以下祖父とする）に対して非常にかたくなな態度をとる。彼は久しぶりに祖父が来るというのにあまりいい顔をしていない。というのは祖父の語る西部開拓にまつわる自慢話を聞くのが嫌なのである。次の引用は Carl の気持を知っている Mrs. Tiflin が祖父の話を是非聞いてやって欲しいと説得する所である。

“... That was the big thing in my father's life....and when it was finished, his life was done....” ... “it's as though he was born to do that, and after he finished it, there wasn't anything more for him to do but think about it and talk about it....”⁽¹⁸⁾

これに対して Carl は頭の中では納得しているが、過去のものとなってしまった時代のことなどに何度も耳を傾ける価値を認めていないのである。それで結局、祖父の話の腰を折った

り、あげくの果ては彼を非難している所を聞かれてしまい、あわてて言い訳をすることになったりするのである。Carl にしても始めは感激して聞いていたはずであるが、何度も回数を重ねているうちに聞くに耐えられなくなったのであろう。問題は彼の話を単なる自慢話としてしか聞いていなかった所にあるのである。Carl は厳しい現実を乗り切ることのみ目が向き、西部開拓の意義、それに従事した人達の心情、エネルギーといったものへは全く関心を向けていなかったと言うことができる。

このように Carl は第2話ではカリフォルニアそしてアメリカ大陸の先住民の精神的なものの継承に心を用いないアメリカ人の典型であったが、ここでは同じように Westward Movement というアメリカ建国の理想にかかわる、自分のひとつ前の世代の事業の継承に何らの価値をも見出ししていないかのような、あるいは見る余裕がないかのようなアメリカ人の典型として書かれている。祖父の世代はなすべきことをやったのであるが、それを引き継ぐべき Carl の世代はそれを引き継ぐとはしないのである。地理的西部、フロンティアがなくなってしまった今こそ精神的フロンティアが求められなければならないのであるが、Carl の世代にはそれが理解できないのである。

このことについて祖父の側からは時代精神の変化に対する危惧として現われてくる。彼は自慢話ばかりしていたことを後悔しながら Jody に述懐する。

“It wasn't Indians that were important, nor adventures, nor even getting out here. It was a whole bunch of people made into one big crawling beast. And I was the head. It was westering and westering...”

“...Westering has died out of the people. Westering isn't a hunger any more....”⁽¹⁴⁾

西漸運動が必ずしも国のため、理想的共和国を建設するためという崇高な目的でなされたものではないにしても、これは前進しようとするエネルギーの象徴であり、国を挙げての大事業であり、それに従事した人達の文字通り生命をかけた参加であったはずである。そのような気概が国中から消えてしまっていることへの弾劾と言えるのである。さらにこの引用からは強烈な生命力、人間としての連帯感、やり続けようとする意志、行動力、そして大きな目的、理想といったものが伝ってくる。これら全ては、不況の1930年代のアメリカには欠けていたものであり、スタインベックがこれを祖父に語る目的は、読者に American Dream そのものを思い出させることにあったと考えられる。スタインベックは既に引用したように Mrs. Tiflin の口を通して祖父の役割を明確に述べていた。即ちそのような大事業を担った祖父の今やるべき仕事は、それを語りつぐことであり、彼は「語り部」として語りつがなければならない宿命を背負わされているといえるのである。繰返しになるが、Carl にはその教訓、祖父の心は伝わらない。そして同世代の Mrs. Tiflin や Billy も祖父を尊敬はするが、それを受け継ぐ積極的意志は見られない。唯一人祖父の話に聞き入り、祖父を思いやり、彼の精神的遺産を引き継ぐとするのはその次の世代 Jody しかいないのである。

Jody は第1話のいかにも幼い様子から、この第4話では非常に大きく成長していることが書かれている。Jody は祖父の話聞き、父母そして Billy との間の話や対応を見聞きしながら、父親のやり方に対して批判するようになっていくことが判る。第2話、*The Great Mountains* では、Gitano に同情を示さない父親に何も口出しができなかったが、この第4話では「出しゃばり」と言われるのを覚悟で、祖父にインディアンの話を聞かせてと頼み、又最後の所では自分の立場をしみじみと感じている祖父にレモネードをつくってやるという思いやりすらみせるようになっていく。このように他人の立場を思いやり、自由意志で行動できるように

なっていることから、彼が成長するまで禁じられていた銃と実弾を、自由に扱える日の近いことを思わせるのである。

このように第2話では Gitano が山に入ってしまうことによって Jody の中で成熟しきれなかったものが、この第4話では「新しい精神」ないしは New Frontier Spirit として Jody の心に満たされ、そのような Jody の前向きの姿勢によってこの小説全体が明るさに向っていて、限りない希望を感じさせるのである。

スタインベックは30年代を乗り切るために、New Spirit を持った New Generation の出現を望み、それを Jody に託したといえるのである。Jody が危険を承知の上で、あるいは敗北を覚悟しながらも、祖父の理想を自分のものとして前進する新しい開拓者になってくれることを期待しているのであり、The New Leader of the People の出現を期待しているのである。ここにスタインベックのメッセージが凝縮されていると考えることができるのである。

つけ加えると、この行動力、この希望がスタインベック文学の特徴のひとつであり、30年代小説の特徴でもあり、さらにこれらが *The Grapes of Wrath* へとつながるのである。短篇小説はよく長篇小説の下敷にされることが多いが、この *The Red Pony* という一見牧歌的な作品の中にも以上のような *The Grapes of Wrath* へとつながるテーマが脈々と流れていることに驚きを感じる次第である。

最後に以上の分析から、この第4話“*The Leader of the People*”はこの *The Red Pony* という「少年の物語」に深さと広がりをもたらし、その思想を補強している点から大いに評価すべきであろう。

4

ここまで第2話、第4話を中心にスタインベックのメッセージを探ってきたが、最後に *The Red Pony* の basement になっているものについて、スタインベックの生物学的理論を中心に考察を加え、作品の理解をより深めこの小稿の結びとしたい。

スタインベックが *The Red Pony* の中で繰返している重要なテーマのひとつには生物界の“Life and Death Cycle”があった。例を挙げるまでもなく、全ての生物がひとしくその範疇に入っていることが書かれている。もちろん人間も例外ではなく、生物という側面から見れば当然生物界の摂理に従わなければならない。それは、個々の人間がどのように行動しようとも、人間という集団として見ると、生物のひとつの「種」として生物界の法則に従っているということであり、その最も重要な機能ないし目的は「種」の保存とすることができる。故にその法則への適応を続けることができなければその「種」は淘汰され滅びてしまうことになる。この考えをさらに発展させると、人間という「種」も含めて、全ての「種」は宇宙というひとつの生命体を形成する構成単位とすることができる。そしてそれぞれの「種」は宇宙の必然的プロセス、言いかえると宇宙に具わっている法則に従っているということになる。スタインベックはこの理論を Westward Movement に当てはめて *The Red Pony* に用いている。

20世紀英米文学案内22「スタインベック」にはスタインベックの生物学的理論を説明した次のような一節がある。

『人間は個人として存在する自由と権利を持つが、たまたま共同体の中にあつた場合には、その「集団人」の意志と力に従わなければならない。そしてその個人は「集団人」そのものとなって流動し、たたかい、殺戮^{りく}を行う。「組織」の威力には、原始

動物群の本能に近いものがある』⁽¹⁵⁾

この引用は第4話“*The Leader of the People*”の祖父の言葉（一部前出）“... It was a whole bunch of people made into one big crawling beast. And I was the head. It was westering and westering. Every man wanted something for himself, but the big beast that was all of them wanted only westering...”⁽¹⁶⁾と全く同じことを言っているのがわかる。そして祖父は続けて“... I was the leader, but if I hadn't been there, someone else would have been the head. The thing had to have a head.”⁽¹⁷⁾と云うが、これについても *Sea of Cortez* の中にアメーバーにたとえて同じような説明がある。⁽¹⁸⁾

このようにスタインベックは自分の生物学的理論をかなり明瞭な形で *The Red Pony* のテーマにかかわる重要な部分に用いていることがわかる。しかしここでの彼の理論は E. Ricketts の Non-teleological thinking (非目的論的思考) ではなく次に引用するリッター (Ritter) の生命の有機体的概念に傾いていたことが書かれている。

... any organism (including man) must work toward recognizable ends and goals if it is to survive, ...⁽¹⁹⁾

即ち彼は非目的論者というよりは目的論者としての面を見せているのである。スタインベックは1966年発行の *America and Americans* の中でも現実のアメリカを分析するのにそのような目的論に立った生物学的理論を用いていることがわかる。

言うまでもなく、アメリカは人種のるつぼで多種多様の民族の集合体であるが、各 ethnic group には多くの相違点があるにもかかわらず統一ある集合体として機能している。個々のアメリカ人、そして個々の ethnic group は自分の目的を持って自由に行動しているのであるが、アメリカという統一体としては個々の目標、特性は消えてしまい、アメリカという集団の原理に同化してしまう。そしてアメリカは個々の持っている以上のエネルギーを持って新しく誕生するのである。

しかし30年代のアメリカにはそのような図式は当てはまらなかった。そのようなアメリカの再生に最も必要なことは何であろうか。次は *America and Americans* からの引用である。

Is that what we are becoming, a national kennel of animals with no purpose and no direction? For a million years we had a purpose—simple survival—the finding, planting, gathering, or killing of food to keep us alive, of shelter to prevent our freezing. This was a strong incentive. Add to it defense against all kinds of enemies and you have our species' history.⁽²⁰⁾

この引用からわかるようにその解答——アメリカに最も欠けているものは、目標を持つということである。個々人の目標も統一体としてのアメリカの目標も共に再構築されねばならないのである。これらは1960年代のアメリカ、ベトナム戦争により混乱している時代のアメリカへの提言であったのだが、全くそのまま“*The Leader of the People*”で祖父が嘆いていたことと合致するのである。スタインベックはこのような観点から不況に打ちひしがれていた1930年代のアメリカの再生には集団のリーダーシップ、夢と目標、新事態に適応する能力を持つことの必要性を痛感していたと思われる。そしてその思いが、*The Red Pony* の中でもひとつの提言として光をはなっているのである。もう一度彼の提言を要約すると、ひとつは、古いアメリカの遺産——歴史の浅いアメリカがそのより処にできるかも知れない、東洋神秘思想につながる土着の者の持つ精神的遺産——の確認であり、もうひとつは、新しいアメリカの

遺産——Westward Movement に代表される建国の理想の再確認である。

次に彼の生物学的発想を中心にした世界観の basement にあるものについて考えたい。それは先ず紛れもなくカリフォルニアの自然であると言うことができる。 *The Red Pony* で見られるように、ギャビラン山脈に太陽が昇り、恐ろしいサンタ・ルシアス山脈へと沈む1日のリズム。その中で先に述べた生物界の Life and Death Cycle が事もなげに繰り広げられている。スタインベックはそのような自然に大きな興味を持ち、動植物、そしてそこに住む人達までこまかに観察し、Concord の自然を愛した Thoreau のようにサリーナスの自然を愛し熟知していたという事である。それをさらに *East of Eden* の冒頭の部分と重ね合わせてみるとそれが一段と鮮明になってくる。冬の大雨とそれに続く洪水、それと対象的な乾いた夏、このような荒々しい気象が稔りの秋を約束してくれる。しかしそれは何年か周期に大旱魃が襲う厳しい自然でもある。又そこにはもっと大きなリズムもある。サリーナス溪谷を掘ると表土、砂利に続いて貝殻や鯨の骨が入っている海砂の層、そしてその下にはアメリカ杉の木片が混じる黒土の層と続いているという。このような変化が自分の足下で起ったこと、又現に今でも起っているのだという「大地」ないしは「宇宙」への畏敬の念と、人間の矮少さを痛感していたであろうことが想像される。

これと同じような自然との交流は *America and Americans* の中にも見られる。少し長くなるが引用してみたい。

Quite a few years ago when I was living in my little town on the coast of California a stranger came in and bought a small valley where the Sempervirens redwoods, grew, some of them three hundred feet high. We used to walk among these trees, and the light colored as though the great glass of the Cathedral at Chartres had strained and sanctified the sunlight. The emotion we felt in this grove was one of awe and humility and joy; and then one day it was gone, slaughtered, and the sad wreckage of boughs and broken saplings left like nonsensical spoilage of the battle-ruined countryside. And I remember that after our rage there was sadness, and when we passed the man who had done this we looked away, because we were ashamed for him.⁽²¹⁾

さらに *A Life in Letters* には次のようなエピソードが見られる。

You know the big pine tree beside this house? I planted it when it and I were very little; I've watched it grow. It has always been known as "John's tree." Years ago, in mental playfulness I used to think of it as my brother and then later, still playfully, I thought of it as something rather closer, a kind of repository of my destiny. This was all an amusing fancy, mind you. Now the lower limbs should be cut off because they endanger the house. I must cut them soon, and I have a very powerful reluctance to do it, such a reluctance as I would have toward cutting live flesh. Furthermore if the tree should die, I am pretty sure I should be ill. This feeling I have planted in myself and quite deliberately I guess, but it is none the less strong for all that.⁽²²⁾

以上の引用からわかるようにスタインベックは感受性が強く、自然から大きな影響を受け、それは又神秘主義的傾向さえ帯びている。このような傾向は、インディアン達との交わり、東洋思想との出会い等により増大していったものと思われる。そしてそれに一層拍車をかけたのはフレイザーの「金枝篇」であり、D. H. ロレンスの *Etruscan Places* あるいはメキシコに

関する著作等の原始主義あるいは原初的人間社会に関する資料であったと思われる。最後になつたけれども E. リケッツからの影響は非常に大きいものがある。彼はスタンフォード時代あまりクラスには出なかったが、彼が関心を持って出席した科目のひとつが生物学入門であったことは、彼の生来の自然に対する興味の延長であろう。E. リケッツとの交際により海洋生物に対する興味が増していったのは当然のなりゆきであり、さらに E. リケッツの生物学的世界観に心酔し、彼自身の理論を醸成させていったのである。

スタインベックは自分の最も良く知っている、そしてこよなく愛しているカリフォルニアの自然から醸成した生物学的理論で *The Red Pony* の基礎固めをし、その上に 1930 年代のアメリカにひとつの提言をしたのである。それから 30 年後の 1966 年 *America and Americans* で先に見たように同じ発想でアメリカに提言をしていることから、*The Red Pony* はスタインベックにとり並々ならぬ自信作か、鋭意の実験作とすることができる。

<付記> 本稿は第 5 回日本スタインベック学会（昭和 56 年 5 月 25 日、於法政大学）のシンポジウムに於ける口答発表にもとづいて執筆したものである。

注

- (1) 同図書館にて草稿に目を通した法政大学教授百瀬文雄氏によると『タイプ原稿で 175 頁あり、5 人の登場人物（Jody, 両親, 祖父, Billy）をめぐるひとつのまとまった小説であり、“The Great Mountains” の材料は含まれていない』ということである。
- (2) John Steinbeck, “My Short Novels”, *Steinbeck and His Critics*, eds. E.W. Tedlock, JR. and C.V. Wicker (Albuquerque: The University of New Mexico Press, 1957), p. 38.
- (3) John Steinbeck, “The Great Mountains”, *The Portable Steinbeck*, selected by P. Covici (New York: The Viking Press, 1968), p. 336.
- (4) *ibid.*, p. 365.
- (5) *ibid.*, p. 366.
- (6) *ibid.*, p. 367.
- (7), (8) *ibid.*, p. 372.
- (9) John Steinbeck, *To a God Unknown* (London: Heinemann, 1973), p. 212.
- (10) John Steinbeck and Edward F. Ricketts, *Sea of Cortez* (New York: Paul P. Appel, 1971), p. 89.
- (11) “The Great Mountains”, p. 317.
- (12) *ibid.*, pp. 368-369.
- (13) “The Leader of the People”, *The Portable Steinbeck*, p. 401.
- (14) *ibid.*, p. 414.
- (15) 石一郎, 20 世紀英米文学案内 22 「スタインベック」(研究社, 1980), p. 9.
- (16), (17) “The Leader of the People”, p. 414.
- (18) *Sea of Cortez*, p. 138.
- (19) Richard Astro, “Steinbeck’s *Sea of Cortez*”, *A Study Guide to Steinbeck*, ed. Tetsu-marō Hayashi (Metuchen, N.J.: The Scarecrow Press, Inc., 1974), p. 178.
- (20) John Steinbeck, *America and Americans* (New York: The Viking Press, 1970), p. 139.
- (21) *ibid.*, p. 130.
- (22) John Steinbeck, *Steinbeck: A Life in Letters*, eds. Elaine Steinbeck and Robert Wallsten (New York: The Viking Press, 1975), p. 31.